

911.3
八
天

之

誹謗叔孫氏

春秋葬白雄著 拙堂老人補

誄贊麻琴

全三冊

江都 製本所 英文藏

東元土卯袁彬諸寂乘



少人歸之於其子也

（三）般若波羅蜜多心經

般若波羅蜜多心經

般若波羅蜜多心經

般若波羅蜜多心經

般若波羅蜜多心經

般若波羅蜜多心經

般若波羅蜜多心經

般若波羅蜜多心經

お葉と重ねてあらぬと
活ふがよしもんや又わうま

春東くはひむか風よりし

きく那う活うまくへうや

ひゆうと寝の火ひそす

公の毛りうばく寝る引

方と寝ゆきぬよせんく

もし寝とがく營神そり年

物事の事は今もかく

しむるにいづくら

すまへてよきとす論

と來るまへてよき

事へ還りよき

文化九年七月

富小路從二位刑部卿貞直卿

松齋主人

富小都號二封印時興貞直

主の事とそれ

事と其の事

かく、さと圓えゆにあひろばう人の
ちゆゑよさくにて、よりこゝりておれ
ちゆゑよそく、もとめのうやみのうせ
きつまほに、うすくまわに、うむがり
ふ、或模様、たゞくのうやかくと
ひそひそ本の手、ちよどくまづくすゆゆう
走るに、けり、さくら、おさすさる、せんじやう
人、ゆきよのうゆく、うをとくよ、うをとく
玉をうすく、ほり、ゆきよいて、うをとく

行れそぞと身熱もじめどもあき
馬のまへに、うそひ生あらす、寫真木了事
一集をあつて、そぞのと著せしは
いよもやみせんうちれをすくはえ様の
正しく御詫びとづんでいたるいぢ
あそそはお外りせしけいよ
めうきよみせんうま安い、山仙
ゆき下よ、はく山のいふことを、いふて
申す

王化の年

のやまと

三経也

序
可解不可解之一語不啻我詩
之論可以論誹諧歌也夫諧諸
之為歌僅十七字為一首言簡
意深宜哉其妙處在可解不可
解之間馬白雄居士此撰解其
可解不可解之妙處而得拙堂
主人之增補其書初備矣今茲

壬申之夏 刻成以予之興自雄氏

有舊 諸題數言時新聞小園

移花種竹日就園丁之事筆硯
曬者數句聊書之以記姓名而已

江戸詩人詩仲老人太產行

序

天史

釋仁

凡例

一 此書安永選本寛政選本二品なり

當承本亦ありて寛政本より是き文

ありて寛政本よりて安永本よりある

文あり今寛政本よりて参考用

(安永本よりある文を傍補でつりの
もの也)

一 章中より補とある以下を皆傍補せ

文あり又三段行の文ありよしより
補あり一章傍補あり、三章の
よしより補ありと云ふ事も亦一二の傍補
あり向より**補**あり四句の傍補也
又章中より**補**ありかへ章其の事も
補がある事との黄のねのはあへる
御教の事

一 徒未写本より抄入
魚魯鳥鳴馬の傳下と承の事

さきの引がある引の元本す
うちを悉く改ひきとてありますと
人ふ志をぬ此の事もやゆりよぢうよ
有時の用事の長明もあり今これと
兼好は師よ改じて改めてあるべ
一 そき紙とちへがれ祖翁とおさうの林某
の事なりみるからみるの事
すく間

一 石文で異体の字なるハ他有つるをとぞく

或大集よとちをもるを號名をぞふけ
ゆう

一 各蓋草の初えふ祖海の筆もとを多く
正氣の規矩とみ其の筆は才す調友
乃雅珍めて後もとさくまづのき
載き又鳥辞の登るあこらが載さる
をす撰者白鷗うふをのせす今抄補
形て白鷗乃ひ才よ能あるをもと
ゆき序亦白鷗は幼いを一ものせき

一 せむる門寺のゆよもてあく
まのせ故よ篇尾よ

一 一書の祖海の遺稿をりゆくし
古來ゆくの革のあくを拂拂へばと
も醉居士の夜話とあくと二巻と
お道よあくわげほの御方のあく
あくと他見をちかるとつひいわき
争ひきのあくわくれこり 因の
かねはるよめのとく禽獸く

三

まのたうふす

かのと記語あれとも絶友のときえり
是を公よせんとぞかよ罪をあらう
魂へと因縁補とかくさんと上梓と
着ておもづて西風の絶世よろ擾め
くありけれども争う罪も亦減却せん
少年の人産業のひすある時も絶世と
ゆくべ絶世をやせんと多くも歎くよ未
のちと見えり四年中のがき古と奇

古の意とも何へかと見てり
あるをやるてゆくさくも月夜を
對してみのち絶世といふゆくも出る
なり又老矣の間ちく候居の跡より
故よ絶世とぞく絶世はあはれ
あはれよ是を破るとほめがあら

杜堂老人稿

まのたゞふす

かの正紀詔あれとも絶友のときえり
是を乞ふてとぞうかよ罪をとるう
庵にて旦増補をかへしを上梓と
著せらるて正風の絶世よろに接の
人あらずむれでとすら罪も亦減却せん
少年の人を業のひゝある時を絶世を
おもへるがをなはまくも黙つま未
の名を是より是年中のひゝ古事記

俳諧寂琴目録

上の巻

泡鳴の龜船

一丁ヲ

吹情の本ト

五丁ヲ

三の情の本ノ

六丁ウ

俗情の本ノ

八丁ヲ

朝情元古の本

九丁ヲ

換骨の事ト反轉

土丁ウ

同葉の事

十丁ヲ

一の文書をもつてゐる事は御ゆゑで 東丁ヲ
文書もありの事本 東丁ヲ

文書をもつてゐる事は御ゆゑで 東丁ヲ
文書をもつてゐる事本 東丁ヲ

文書をもつてゐる事本 東丁ヲ

一句の文書をもつてゐる事本 同ウ

歌題絶唱題の事本

絶の事

少しだまみふりある事本

少丁ヲ

漢語の事本

サ丁ヲ

和歌の言葉とほりの事本

サ丁ヲ

草書古語古字等古詩の事本

はづきことする句法

同ウ

名詞をほり句法の事本

サ丁ウ

名詞をめりいあくすれ事本

サ丁ウ

名詞をもつてゐる事本

めりいあくすれる事本

サ丁ヲ

名詞をもつて新ひるの事本

めりいあくすれる事本

サ丁ヲ

けぬあまてるのまこと

ゆくまろま

ハリテウ

名前ふよもと御出づる

ハリテウ

神祇

ハリテウ

釋教

ハリテウ

憲

ハリテウ

旅

ハリテウ

税

ハリテウ

贈答

ハリテウ

餞別

ハリテウ

留別

ハリテウ

哀傷

ハリテウ

述懷

ハリテウ

懷舊

ハリテウ

馬讚

ハリテウ

發句の体をひく

ハリテウ

ききこふらむる
さあやある
あくまくする
ほそくかくひうる

ききこふらむる
さあやある
あくまくする
ほそくかくひうる

ハリテウ

絶えずやうへたる

ぬぐへてさる

色をもてのる

感情あるる

親親相

まめに對を親お

まめをあきらめる

一作あるる

四十二ウ

同

同

同

同

同

ウ

中の巻

回文

物の名

墨ヲ

同ウ

船の事

才三の事

六丁ヲ

縣句他季うはすの事

九丁ヲ

二句一意の事

十丁ヲ

れもうき乃事

十一丁ウ

名所り名所附の事

十二丁ヲ

志季トよ所の事

十三丁ヲ

大勢の中の人をもむる法

十四丁ヲ

さほを月の事

十五丁ヲ

他季の紀経の花機の事

十六丁ヲ

あけりるの事アケルノトト 十九丁ヲ

意向の事イシヨウノトト

立丁ヲ

向うの事ムカシノトト

立丁ヲ

縣々二つの間屋屋の事クニクニツノミヤヤマノトト

立丁ヲ

縣々諸路のあらわしの事クニクニツノスルガシノトト

立丁ヲ

縣々自他の事クニクニツノジヒタノトト

立丁ヲ

下乃卷

立けりもるるの事リケルモルルノトト

其一情の事クチヨコノトト

一丁ヲ

貰二腹屋の事アキニツツヤノトト

二丁ヲ 同ウ

貰三きくとみの事アキニツキウトミノトト

三丁ウ

四四時の雨ヨリヨリホヨウノヨリ

四丁ヲ 同ウ

五五尚季かけある事ヨリヨリホシカケアラヌ

七丁ヲ

六古附古教無はあらる事ヨリヨリホシカケアラヌ

同ウ

七縣の文書ムシナシの事ムシナシノトト

八丁ウ

八修ハセすまくむ事ハセスマクムノトト

九丁ヲ

九二修ハセすある事ハセスルノトト

十丁ヲ

十見立ミタタクるの事ミタタクルノトト

十一丁ウ

十三あらきるの事アラキルノトト

十四丁ウ

十五丁の角地の事
十六丁の高人ふ意で見る事
十六丁ウ
十六丁ラ

禁句の事

不易流行の事

同ウ

貞外

十五の哉の事

十五丁ラ

十五のや乃事

十五丁ラ

このを一歩する所をもぐる事

十五丁ラ

開締終

俳諧叢書卷之上

白雄坊選著

拙堂增補

古池や蛙飛こむ水の音 翁
きのきの木撓ち馬う吟きたり
この二句を蕉門う要経せつともそぞくへ
ねづひや萬う吟あてしひせり翁
やえふねづひもアモテ様の事
萬えふもホムホムの事の一葉哉

あらまち稻はるまくたすりよ

翁

せ船をひか年うれむるも

ゆもがめなすやまの松尾花

四時の親相はるす齒牙を咲ひて正風の
育経をすみ

まくまく

補

玄旨法下曰古を奇と見たり先おとぞみ
あく我義理をとひてさて義理小あく
ひづぬばえとが別とてと毛乞長短
得失とあてて教なるべし能惜もえもす
今あく再三吟してまく義理とあてて
あく古今人の一致あんべし能惜もくわう
うく古今の古とほりて呂十七文

新編

白

うくもの解をひだらとくまとく津
味そぞれへ妙處をひかくとあくよあく
をひくかくす程とがくくゆゑく
捨てまく解へかくよくあくへゆくの
あふからむんじゆをひくむやく
ははみて味あくと我能惜よりきく
ふきとくい其得力わくわく變ゆるの
たくち中まくまくまくへゆく

まくまくまくまくまくまくまくまく

翁

まくまくまくまくまくまくまくまく

白痴もひりこゆれめくねす

初くを猿も小裏をほくも

西流すゝくとよひりのまを入る
すまは事す今して旦暮よ龜船
もあ
去來の方言と同
祖翁曰迦叶より物を應する
ては角ともかく祖翁の言ふもの
を物と見るね
又曰迦叶も人の怖いと云ふ領
と自他の觀おもひきのとあるま
と、草木のおよびいと歎のとき墨を
くもむやさねへ道す駆れ乞思す
むうひきのとなりふ念起らん
一ふすじとあふと不候とちふ
ゆう別風貌の一舟也さりやとて匂ぬ
尔観お城の門よりりづくらうす
哀樂ともすまちぬはとてせぬま
嘆えまつまうむとぞとぞ

風雲の風情也俗よきを雅俗に
あらわす

補

西風の風情も古不易の句体にて
ふ景子不持をあらわす。あらわす
祖翁ゆき延喜天和のじき異体も
亦亥一異体とも流行の流行の
一時くわう雲の風すの、數年を経て
とも摩るのうの仙化曰其角風て
後承三年あるとすをいとく後て
あると嘆嘆あせり去來曰流行の
をすれ也形容衣裳等のふりふ
すて時くわうすあるのうとく
すれりまほも亦流行なる
金(きき)をもと西風と流行とも

あと水うそ水かねりあらま
タテアリて一アリてニアリ
アリテテ多氣アリ作リモ
或ミ理应シテ縫或ミ縫キテ縫
名もほりぬのやうさん或日家院
寂連の姫也寂連お奥ノテ大丈
入三のああ門才小あらまき禪門
やうれて曰く仁赤東の哥仙
見參のば難波あらりふとせ回
きとせ哥仙とあきゆ
んといのやと圓をあらて感
やまきとせ繩波の西ノ心
西風子あま西風子たまなく自
然の實情よ得る事のあきひああ
うぐく魯毛の山とあはれ也
あれ毛のうう御生の美をりふ也
以貫之と聖人アマハシも生
ま

のやなとも考ともあら忠とも
あら仁ともなり義ともあらく
おもふるあるありまし、但翁す
口をうち無をふるりの紙波神
來りしを但翁のれを看候し、其
實を妻をりて繩波と謂へ西風
志をもす。すまし地津子繩波中興
の翁也船頭貫之再いあくよ来も
意も、めのてひそ歌をつらへ天地乃
造化りぞすり草あら、繩波も海と
あら、但翁のりもたすひ道を移
てとすり峰も御政とあります

蓬莱よりきりや伊勢の初段
蓬莱よりきりや伊勢の初段

其角

かくのとくをてむるを因せましを
せらう嘆き詩を吟嗟咏嘆あり
歌ふ餘情ゆり純朴の言十七言
ゆく嘆きの如先とぞの
句くももくちゆきあらゆり修
すじあら二作と絶すあらへるあり
歌の文ある有恩をかと好む
有信牛の俗よひをある有理をかと
とある方をもうちの人を門かわあま
をくぐり乍ら争いをもよもじる事
つけ

古哲曰あら努力あるが、足らず
て珠をもつたずして珠をもつて
又曰よきもとせんとすも病なし
せんじきくがりもんとすも病なし
くす上りとすもんとすも病なし

まもくのくに剣て自己より
くれを志へかく人よ上手
ともゆるをくく珠くき、経向も
出へ一能くもくく常よたの
むあら金
祖翁曰人の旦暮ねあくかくゆいて
春秋をや射をあくをきくえさる
ともうもたのじいきよあく
りの主一を適く道傍作家
三年不成の語をかくへ

姿情の事

以りなり論文一聲をさだふ情を
づつすといふも初段の下から
情をささかぬものちよとといふ
をいきなりするのめまづひて地へ

如し前後の端はあくまでも認め
已う心とお合する時を一とよもみて
例の自らのたのむことさへ

補りのひ（已うこううとお合する
時を一とよむとてとて純然の出来
事境をあくまんしてんじゆを得

李
白

高
手
を
も
う
あ
は
ア
と
待
候
哉
翁

塵のきよ人の旅人ふれづれ

一
髪

かくのくへ
ほほのあ後よかく
さうをもるへ

補

詩法要標云詩之義意不一要其

歸不過情与景而已情兼景者上也
偏到者次之
偏到者情のとあるが爲到くは是偏
到の風情のいふよ同一又姿のいふよは景
到といふ是偏到より風情のとあり
又情中寓景景中寓情あ
又云惟情可以全篇言然苟無法達之
易入流俗故曰融情於景物之中托思
於風雲之表者難之
字を眼あけ入るゝにあすり
をゆびとり

谷川やる葉落とも秋の暮
益青
今林竹の声あゆゆ
涼
桺居

そぞくもて風聲をもれ風情の

向う次の章があやうれ

三の情の事

谷川

余情。余情をすこしあげて一る乃
ずあらもあらか人余情の浅ゆよき
あめり通情をむるく。こりおな
くやす親友朋友の情。すこしやう
きめのあの人ちやうえの意のゆき
あへとはきをあ情よあくすとし
う。すくねまわす。くらひと已のまの
情ふりてせん人をかくよ情をまく
絶句巻中の中を出る。

(補)

情といひ言があたりあらの意をいよぎ
くと、そぞしてさうへくるかきよ
うく涼しきとつをまとめてまく。一

すもむごむご

桔梗あからそのやあまう秋の暮 箕翁

やく わく ぬく情 あまう

秋もあからそのやあまう秋の暮 あま
うふくきてやうへんもな

ぬく 暖へた余情をあまう

渡すかげて江の花の多く流うる 元兆

まくへきむかまうあ

まくへきむかまうあ

縛りき金持をあら
野さしをかす風のあじよ

翁

於乎掛念の行御をめりへとあい
時のうなりありまく皆も怪ふ
きく人腸を引あひ

秋つまくちゆのあひ時やうに 猫 離
あうちゆの湯波やあひ鐘の邊 鼠 弹
中くまゆをこむれり秋の暮 謂 山
朝のうれしむ人々もむらうれ 和 及
こゑの匂くまゆを通帳をあら

時 痴をあらむゆあらす痴をあ
わらむ痴ハナ情を獨ひ痴情の論
痴者をあらすてすらふへうく

補

まくで名をあらむゆあらす痴をあ
わらむ痴ハナ情を獨ひ痴情の論
痴者をあらすてすらふへうく
あをく情を離せんハセ

補 俗情の事

俗情と云ふはうのまなづくと云ふ
か面も叙述老子をも奴僕の云ふと
思ふ形空ぢて口よまのでと人を
のこす内からをよ歎き妻夫の意
み苦しきと重ねをもくちうをうへ

なまき皮革羊革のりの革也とまつて
のくひ方を以てさすもじとも経みを
俗情を吐出するものなり

うりやうりぬりほきの財物の多き 越々人

解 俗云蕉翁伊賀うりぬりを古考
曰ひうるは俗情ひるより一すくはり不
どりあるゆうりかきり風雅のよもよもと
本情をあらわせよともうり
たゞく通情えりとも俗情をきらふ

一玉の圓を人下向うせよとさんへと
そぞうかひをうへしゆるま

叶葉も俗情うりぬりあらわす
翁自らく縁を深むのはよう

こきくのをもほへうまへ

賽

詩歌連俳ともふ思ひを述べるりのあれ
けいもふいもあおく十七字より上アのと
きり俗情を況處うそうへんりかうきの
小あくとも竹窓三華云榮名厚利、
世の口へくわくそめにあそぶと上本免て
得へくわくそめにあそぶと上本免て
がくくそめにあそぶと上本免て
あれ退くもともかほをくもくもくもく
ある人をすきをうりまくもくもくもく
俗情をあゆきうせん

補 詞情新古のう

古有言云情を以新為先詞以舊可
用云

定家曰頃々三代集み出でて用
紙物も亦多きを新らへて其の紙物
用くあると謂ふありてよびり出でて
用紙を以て或曰紙物も俗紙平手紙を
紙物ともいふもの也と云ふへまく是故曰
俗紙平手紙と歌連歌よつたをさる
紙物もはづきをりつゝ四一の句つゝ
みもすれまのうも

さやうともあとも書かざり
りの是を俗紙平手紙といふ歌連歌よ
はづきをりつゝ事もあらずともはづき
いふとて俗紙の俗言鄙言つるみを
いふとて又新詞りつゝもありま共に

去來

祖翁曰此の昔とせざるを名所

賽残も用意教り花乃森

御くも古人も古の名とぞせす
御を継りてかくお掛けするいふ

詩子詩語あり文子藝字あり歌も
りやうり紙物も紙物あり祖翁和
焉の名を季多冬よ多ひ傷ち未嘗堂
子きて紙物を宗因よ多ひ傷ち未嘗堂
紙物よりゆくゆりのを取らんと紙
物の花を花の花と頼倒せらばがる
細工にて挂こと制へるもへ去来すら
くのういさんや文育短考とて紙物
をりあひてかくお掛けするいふ
許大日上もまた仕負して下を
にまはれ候りなす紙物の底のめを
きる時もおもよづくらむ底のめ
をうながすかうすて紙物
をうながすかうすて紙物を

得へとよせられどを必絶棄ともかく
まつまつおうへく頃もたゞあはる
ちあは

アリモ天の山あらそくゑの
ホラハナやくわゆむときち 千葉

これえ小き井の様みゆの風吹てア
赤きもよりもうけのうる焼世乃
今若きをそとづこぬもとちよのかき
アヌムセのをあくあふれハぐく
嘗へ一物

有用かして多用の後より

ちくらが佐波横瀬の川 翁

十二文字ヲすとまことする也以テ、も
有井のもよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよ
なる御詠論子不

ソヨのややや足の折りまきよ 両分

そよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよ

一
大あひづきのあきわの

けすきすきのゆきよとねくまくまく
ぬくまくまくまくまくまくまくまく

補

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

解

物をもとすもくまで云はれり。ゆゑに
ゆゑ入らるるゆゑに、ゆゑに
あふつるうるきうのゆゑにとい
つめうけきのゆゑのとくそまのゆゑ
はりぬふさかとみづうるうるこりて

換骨の事

(補)反對

(補)換骨とも御同にして、もとよりからう
てあるればいふうり

ものへい唐風

翁

夏や草木含むる秋風

詩六

次第あるたゞくすまの秋の秋の食てま
すて換骨をもとより

又

修艶の嵩立するまし東の店

翁

寺かまくら猿の嵩立る年の月

其角

其角曰け後反転して描の嵩立
しの海人の嵩立てもあれ、寧ら乃
一株を縛くさん小さき等す數の筋めぐ
あるへうす一の身をひそめありさ
味いあそぶひるう

(補)

徐陵鴛鴦賦曰

山雞映水那相得 孤鸞照鏡不成雙
天下真成長會合 無勝比翼兩鴛鴦

文子黃魯直題畫睡鴨曰

山雞照影空自愛 孤鸞舞鏡不成雙

天下真成長會合 兩鳥相倚睡秋江

解 又

鬢為愁先白 顏因酒轉紅 樂天

短髮愁催白 衰顏酒借紅 后山

其誰可與之換眉之待

後德李平生

後德李平生

有閒日月無人管 痴心只向夢中尋

守道前大成

又

人の親のかよひりう雀のよ 鬼貫

雀のよひりう人の親 大馬

のよひりうのよひりう換眉あくまの歌

人の親の燒野の歌あくまの 晓臺

是もとおの鬼貫うるう歌たる
うるうのよひりう換眉あくまの歌

補 同葉の事

首の邊よりひりて入せりうなみあ 翁

まお牛毛のまをえせふ風乃狀 許六

去來曰同首のるもあ

捕の袖やきれて峰ゆむ憶悼 昌房

石くえて歟峰やむ月を下 居行

こまくのるもりのくうちらうき
峰やまきの鏡、因えしたく形容を
りいはるすてみてよき相あ。このを
因縁とも又因竊ともりよりくも
ゆきじゆうとある事

まくまくの席をハ源をタウ翁 宗次

けぬき角の匂をまくくする深めく
のけぬき角の匂をまくくする深めく
ぬきぬきの匂をまくくする深めく
魂を入きて二つとあと

人醉く牧くくくの席をあわ 柴居

かく之ハ政容を因るふくく自他
のまくらみく匂を天也想陽承のハ
因縁反對の類をすみくすくすく

補一字の毛をくゆく匂を浅流の事

祖翁曰一るワラうす十七丈らすあ
一立するもあくそくもくあくそくも
徳竹のさすの小舟もの一株たゞす
る子をものの有るせよ終るへと

或集

タスミノ年正月初時 翁

此生一句の言を解せぬか
入集アリテアシモ人モ年正月と
りそぞく時風流の移ふ生

沙糖の孤村ノ帰る秋の暮 保吉

或曰此の孤村小ゆれといふるゝが
きをすまへたり是亦一語を解
する人このゆれと下知をすま
村の暮の寂寥の暮の暮を接ま
あり一語をすも會ですまてよ小ゆ
宵鑿かくそら以てあるわ年
もととくつゝあく胸中、酒盃

光風毒月の如後の夕日あく
りゆめく眼あり幽境古ね清音あり
是一言もひそと細々うるさき乃
はいはよかくるのとさうとよかうふく
一語を取る事とよかはとくとよかはとく
細々とよかはとくとよかはとくとよかはとく
通じるを除くとよかはとくとよかはとく
とよかはとくとよかはとくとよかはとく
とよかはとくとよかはとくとよかはとく
とよかはとくとよかはとくとよかはとく

文字あらゆる此事

そぞれ暴氣にて鹽のみときくや雲 翁

蒲三英やまとうみ布の山の草 山店

右後海の波るがきどりてかく海の

山店

いふものはさあさうのとこをせり

今ともうすくうそをすまゆといひ風景の
うの病こもく切さすくよみて文字
あすくとあるあといひふやみすよ

続月や あやえ丸や

こまちの文をよめりときしよ

月経う 前やあやえ

かくらひとまこと言ねふものもなよ吟さ
ふはよたまもとまのとてけらるるあはじ
連歌う三三の字あすりをよ
二四の字あすりをよへりとも二四の
字あらすりにとむがの口よきるるます

補

三四の文字あすりと

雪をかく人を体も月見哉 翁

星をかくあすみの雪の色 吞 霞

二三の文字あすりと

笑うちうひぬをよきの圃 下 傘下

ちあはく醉のよゑう夕 握 自 槐

古人のまく二四の雪それてとつて二四
あはく一語あくわくちんもとよどむ
てを形りと想翁のよせいと

た文字をあるて向ひ優をけくろ

あらなふねまよひて河豚汁 翁

翁

さる　上り立まをせりよ

すせふ花のあの間の毛見のふ

鳥醉

まよせとありてもあらへまよこ一寸の
優なりとあるもて生るがのむ話れりう

まゆゆきと毛出ふりつらひ
まつやねりひとくわくすまは

こまくの文字にまちあてもまか

補文畧

命あまく春ひて花のはせ山　白雄

命あまくもありてよもんのての文字
みことの優よもんのをまわふゆく
まわへせ

文章代あゆて句の意をほりて拂ふる

きめこもてあゆせりやせり書　翁

きく野山の吟

みじの山の秋風小夜更

ちくまくおもてすま

叶歌をほく處へきるいふきうち方を
やどよせ立ちすたまきへくやも
よふかよな

まもくの風の宮みしゆむ

嵐雪

ゆきをとありてそのさがみ
感音あくやけ。憶持の今や
残りぬと嘆歌の今あるもともと

くもはすをも二種の宿
このこゑあわあわあわあわ

まもくの今あるもと

一句の禁事い歌あくや

朝すく紙たおぬのかく有也 翁

松島行脚をちひきうちうひよ
風雅の情齋中をぞうつうや

まれまつしゆのつまつるの幸ひあくや
ありらし物語人の聲かきき 嵐雪

越人へ接枝のるなり

そめより女郎志の女とよまうある
難波の聲といふ字ふたりとある
餘すよこねうう酒の聲をきく人の
ゆくとすもせうとくとくと言葉ふるうも
半も一もれ幸ひあくや

歌題他緒題の事

(補)

歌題とく歌も絶妙も極まる詠を
つあり絶妙歌とく絶妙かきうる
詠を

朴道やなもひもかきよ涅槃あ縁
綿めきわね金身すりほじる
角触とりなまうや秋の唐経

野水
嵐雪

暁の後波くさりやま念佛

其角

こまく、絶妙景あり絶妙景へいのふ木
御舟をうらに舟あよつて今ひくらふ
暮入舟くもふまく

かくくまぬ底ゑく八橋 柏 翁
黄毛や解よ舊する様の先
はくまく舟中えで舟の林下曲 翠

五月みや観音あれ蕃 橄 嵐雪
かくすりとぬきそと山や秋の風 杉風
萬のあら松くはまくすり拂衣立志
應くとりすたくやまくの門 去来
ゆくまくお時のかきゆく深田の橋 大草

是等の歌歌なり絶力はすきも
あらうふへりからりよき事、をまくして海
歌と絶歌題(別よせ)あるもあら
歌と絶歌題(別よせ)絶力をはすき
くもむきりくまくまくまく

竹乃事

蠍牛角ふとつまよ須ナム石翁

翁

(補)

世のうとうといふるといふもあくのとくあ
トあらうあり蠍牛の角のよしに寧といふ
圓觸といふもあらうたれはよめいひを
なすするササニシキアリスケリ偶言

學のやまときとて野ちの達哉工迪

(補)

雄畧天皇の清寧のまゝとてさうと
牛もとよせゆくに野ちのまゝとてさうと
ゆきとよせやで付ふくへ

郊ちむやいは萬のほ和のか底緒

其角

うのえひりつともあるひわいせといふ
人のやまとくをうそとく清寧のやまとく
せうか底緒のかくもとある郊のまゝ車
をうひ人合ひたゞく
軍書の緒とて古代のよき恩
あそきのよきからくへくの名とく向中
みじきとまの西子對もるかくみ
でめりすみ

義仲の麻黄の山を秋

翁

こそひうちふせうひくすう

(補) 祖翁う景清の花見の舟めき七三葉
とくへ向あまはるもと延賓天和の
流行めき山舟を用ひて一筆を書
貞事のうえ福ふる貞事の元福の

今よりからとて御めき来るるるのほ
却く延宝とてかのゆめの西金の金
方すく多くひま

補 火をも水を以もあまと事

清浦うゑれぬに總れも火をもあらず
のあまとりよふよりて少をもあとてみ
ぬえちうひのまゆむひへ源氏れ、緒お
おのきくまあく、つまく、降りけらば
山うとみこぢりてまくあるとくらわり、
勢きうのひくうけめとくまくらきくらまく

重一

枕寄ふとまげ、おもろ、雜の声

翁

かづかふ秋をめくらま葉の声

支考

是あましをとあましりひを
おもむかねる

呼うえとけりえとまくの聲を

あましをとあましりひ

これも同一路のあまし

白雄曰少をあましにまくとも、穿るハ
一枝をのべるるを解くまくとも、穿る
やくそ妙形るをあましにまくとも

漢語をはる事

馬を馬を残め月を月を祭の祭

翁

小ちの中山の冬を

杜鵑啼や湖あゆのさく酒主 丈草

好みをせうと、りふみをあともと残る
湖あゆの歌へはる漢語と少くふ風めき
落花端午除夜あゆのぼりふあり

元日灌佛名月蠟八寒食
こまくの歌つるる漢語すり

補蝶葉

あれからくちぢりりん、訓あそとくら
和文書者流めてへきくと漢語ゆ
用ふるに絶句をまづりりちゆく
歌す

名月や湖あゆのさく七小町 篇

順禮すうち立てりゆく 岩雪

一向のうちよきあらうとも、聲あの人
あくふきよき

和歌の言葉をほゝ事

紙まぬのぬるよねん雨の花

翁

袖うけふる衣用ひく 素堂

先うつふく言葉をみて絶句
せすきうさりと絶句とをゆふ
うけふる衣用ひくも狭いも狭いもあら
やもをまよすまうすくはく

うりよ
まの歌をひき人をうめく わくわく

わあうよあ葉絶句のよあがふかみ
あらうよしきの日ひやのよあがふ
あらうよしきのあうてかの絶句のよ
へ

補

わあうよほのくとほに柿の葉 奉徳
あらうよしきの和歌のよあがふをほうじてよ
あらうよしきの流れりみくとあらうのよあがふを

勝や世をほり安の山かせき

春鳴

よくいはよとあまにほの絶句

古事記語古歌古詩もよれよれ白法

知足軒新居の賀

とよき家や雀うううよ宵やの栗

翁

淮南子說林云

大廈成而奠雀相賀

さひいひや花のあらうの翌あらう、

撰集抄云中勢元輔扇の哥二首も

すへりのとくろふ
そのくろの扇のうち猪よ宣よよくひ
そ外ゆかく扇のよよくひ
扇のよよくひの深山のよよくひ
くちのくちのくちのくちのくちのくち

あづくみ日はまちる秋の風

翁

明詩選

秋風吹持暮

古道行人稀

登比微陽色

射我霜中衣

石あしやま門あきを夕を夷

牡年

源氏常夏の寒

ちのと川のいりも一すうのまのと

ねすへあそてりしまつと云ふ

いづゆと鰐の魚あす

春まくやうねり首の額はき 一髪

清女枕草紙ふ
弓矢の額つきいづくらまく
花ひすくいづく

青海や羽白玉鷹赤か絆

忠知

古物自記

くわきのわゑをゑくわくわく
名もすまくねりりくまくわくまく
波もすまくねりりくまくわくまく
ふゆく立色うりまひとくまくまく
あくねくねく

名もすまく鳥の毛ひきぬけ厚

其角

古今集

名もすまく鳥の毛ひきぬけ厚

其角

かくのとてはまつたる用

おもてのとてはまつたる用

かくのとてはまつたる用

かくのとてはまつたる用

かくのとてはまつたる用

かくのとてはまつたる用

かくのとてはまつたる用

下すとてはまつたる用

木舟とてはまつたる用

かくのとてはまつたる用

かくのとてはまつたる用

口まくは小坂の庭をゆくと

翁

答へてあまの匂いの捨てぬ
ほりれや誠の友人輕珠でも

岱水

素牛

古入曰東海道のひくもあら
てぬくへて治川の富経きの波子
ゆくよしめに山にたるへ真いさもぬ
金くづくくもふと金

りまくは近けの人にみきめ 翁

補

撫書集云望湖水惜春とぞ

あり或仕ある送別とぞまゐ
一時の誤りとす後世人を
惑ひす一盲衆盲を引つ罪難す
ち、あくまうむかひあくまうむと只か
うむとも以て生す

五月かくの浮舟をつよひむ 翁

と舟きの門たくとせきの月

舟龜をくもりときて

あくまうの網代の水魚を考る

生さん

物語の句く初作をうつす
やうへ

名所不吉の句の事

三あきらめをあがひ古き佛堂

翁

朝はよれども古跡へも文也から 去来

むけ跡やいとまもアモテル

舟泉

御令正興出子の御へ也頃の里

丈草

あらうすきはるをひかへ古跡ゆく
泊宿するもすくすくある日暮れの宿

補 祖翁曰名所よのうううううううう

又

高野山ゆき

又舟のあきらめ古跡難易の寺

翁

角川あく

いきのあきらめ古跡難易の都

貞室

猿金ゆき

眼ふあきらめ山ゆき初松窓

素堂

山へ 番六寺の曼陀羅院をねま

立衣もつかぬ纏らぬ罪深く

園女

八島あさや

海へうかよ和まづいも迷まひ 千岡

伏見のちね

あくらうかよ二度かまふを夜哉 路通

まつゆみて

はうのうるえ鬼うるもひと源

雉舟

我弱の背あくまう人槁の雪 湖春

是等もまた皆を和すありてを名を

津のみ

あくらうかよあすくまむせうの雪ハうと
うり景もあきうらうひといてあすくまむ
せう一法うり三地う名稱よすくまむき
せうよしむへ

名前ふのまこと古歌或ハ古歌を思ひ

ある事

蝶ふくゆきわくわく風うね 翁

ねがひとての大悟をみりひひくまれ

西行の洞をあくま増賀の信を感
じてあす

おうんまくをまゆの神の歌

あらわのむらまきのまなみ
かづきのむきかづきのむ

かづきのむきかづきのむ
かづきのむきかづきのむ

あらわの白川の園哉るとく

かづきの白川の園哉るとく

かづきの白川の園哉るとく 曾良

五條の橋のうみを

橋さとくまふ人ゆの歌 でも 桂士

和まの浦みそ

あらわの浦をおまよ尾をひすすれ

鳥醉

あらわの浦をおまよ尾をひすすれ

鳥醉

あらわの浦をおまよ尾をひすすれ

鳥醉

かづきの杖突坂を度る哉 翁

光廣て紀り

かづきの杖突坂を度る哉 翁

光廣て紀り

光廣て紀り

光廣て紀り

かのうの車ちよ出す野山

支考

ひきうりよ名ふれ難ひゆりせん
みとまくる中よ美りきこむあす秋
を向中よさひくと自然と秋なむ
かうよそむかうのまつてまつゆめ
りくと古くてもいとまつたす

補

そもゆりて句の意を除くするべし

はくくふなとく無ふり
であらむとるくまねま
のきのうとく経く

あらかぬ先ひとひと葉の草

翁

寫本をもとふ酒屋下野

文君う死害む辭のすに
まほりとく生くとく
前酒初御引琴の音せよあひのむ 惟然

傳よつるかよとて

ちねきみのむあきとくの花 越人

古 来の墨葉の一本の句とてひひが
アリテ候ひとくして核又あひ
接うり候ひとくて核又あひ
件 おなじにけをあきとりとぞのよ
うのう頭よすあてりとちじ既たむ
中す

考 其の罪をあくとせんを悪ある

敵千鶴をさし人をすむの角 向雄

さきはうとうとくもとあまくい
をむりおもむくもとく

あ國のねみを郭とす
まくわづりて

あ國のねみを物やほとせす

さかくとーもむるも圓とすをあす
りあそぶこりやうてゆめの
文もよもと書へるす後句の詠をも
味ひある

補名跡よのせみて頃と乃事

嵐峯とまくゆくゆくと蓬莱
方よまく仙のゆくまくあ
古峰一地を捨て蓬莱とまく
用用のためすす門をひらく
よもむくよもと書くあ
美風ふとまくと待人ももを
つまくす方士文人も言ふ
うち重玉子の筆を捨て走る
若女鶴姑射の山の外人
負てふく吟きくらべて

西と轡の転て時十景をあす

山中の温泉ありの冬あり

白雲峰とすとむ極る谷
を理みて山絶のあまく

翁翁

ちんさく西よかを伐る音
東よかよ院の鐘の音
夜よかの底よかとて寒き雪
浦石よかとて向うとてせえ

高麗の傳の言ふよし山

其角

歎世大士をみゆきをまゆき
勾欄を背あがめかりに寛
形るたれぬとのむじう
山みうーの風もゆゆゆゆ
梵音よもよもと樹色よも
かくくくと絶景の書快
をねうす絶景のうちしやま
野すゆくゆくとまゆ

もまよゆくゆくか
不降の地なうて

新撰游大観書のゆうゆ

白雄

初詣の吟たるま

御扇つまゆの細き詩たう風俗文選等
を熟覽を以て之にてのむ家事もあ
虚よあそひ詩を書く文飾もと
よきこして虚もり虛よ走るへうす又俗
中の俗言鄙言の文をもとへる頭
鉢尾とて見えうすとて今いの文
又うなまく、剽襲もとてまくよく
純合をくるはれども終よ生せ一文ま
をぐく味へ

神祇

あらわしの皆せもひぬは遷宮

翁

移りや湯くすの移り着のまき

丈草

考應苦の和光の塵のまくら

許六

他流よつて立音連声多のよ風
すすめ細きあはれきうきをさく

風

蟲活

記

移りきと今野

かのの類い神祇まゆのまくら

白虹

翠因眞有税の吟皆けらるるなす
まゆのありくらるる神祇まゆのまくら

釋教

觀吉の夢見えすもうたのま

翁

おあじゆものゝ事はけの哉

般舟

法然上人五百本忌

以代善やが一枚の法のま

靈活

寺主ゆすあすとくらむ神祇とゆく
ほきそくそくそくゆくゆくゆくゆく
のゆよ其用

意

紅梅や又おまは此玉に簾

翁

秋ひそや冬に挂そもとて森ぬ東北

翁分

虫ほの風すら枕あらゆう哉

文洞

歌のほとく歌あらむべ

歌ふと歌詠あらむけりとてあら
自のあらむぞそと歌詠と用たう、
御くうどねふあらうとまくとくとく

歌ふあらむべ

旅

かく旅てじよふ夜のぬ衣

翁

草はくら毒う人時向む 山川

丈草

そよ風ふねをあらうてねきを

翁

翁中のゆきなづくと旅の下膳

税

先税く税をくふとまのま

翁

弱を拜頤せりへ

時よし肥の馬を秋まく

酒堂

其の角と我室みえ

世をかきあにこまよきよの月 涼苑

死の匂ひを自地範疇を正す

死一

贈答

駿師はうとうかやまく

三木櫻子の花をうめくら

妙源庵柿も二合

重萬也正吉と萬のを

曾良

五木櫻子物の本初の名前我

元兆

経のうてまへうひじ

けうへうふ親等風呂あさ

助雙

同人を送

旅眠る多木村山也とお瓶

言水

茅舎牛翁と申す

おりうれしきりん前月更

土芳

りゆ多くとくに時めく叶う庵

斜影

まよまよ旅床也枝垂れ葉せや

如行

或くよ聞ゆる

いふやうするよほく秋あく風

木因

かの日寄りたりとす

君えよやもよつてせせ草の桶

嵐雪

おもて旅送の向を自他親疎をまことへ

餌別

猿のふたと身を流因り重

翁

猿の首途をねぐる

翁箱根山をあゆむを難ひう

由之

たゞちあらぬ孤舟を送る

娘與

雲をあやしむてしもれ通しす

野坡

餌の向自他親疎をつまよ

留別

川峰みどくよつて

おの浦をちくくほも別をい

翁

さよきくわが身

思ひもく都の秋をきみにせ

素堂

途中西を翁別をまよと

行くとまづきあはるの秋の事 曾良

篇別の句も自己の跡を残さず

哀傷

門人嵐蘭の死する事

秋風の物かゆき葉の枝

翁

其の翁の死をじまひふ

郊のもよそ歌を宿すすむ

翁の死をうながす

ほゆるたゞかみゆみの菴

槐市

あはれやせ膝をかくすまゐ生

野坡

翁の送葬

角の力が餘生よがまや枯尾を

其角

翁の死はのまくはへりて

翁の死を身へりて

歎きよるをあわの恨うれ

北枝

翁の死を身へりて

嘆きよるをあわの恨うれ

其角

あすのまづ

ゆきの身の相ひよむとよ

野水

あすねとし

かのあら出でてやんと踏

落格

かよひにしよをほんじ

をひなすをひと飯よ秋うる

尚白

だよのまよ

ひよかの月のえあうのせよ

去來

ひよまよじしあへくの事

みよ生よかひの水をも

あをひよれうまよ

跡ねよも縹がくはよて境月

史邦

あらふよふう舟をじきいふ

思ひゆる牛の船をくわされ

鬼貫

追悼

みよや船をえやハ峰ふき

翁の因忌ふ角く縁を画す

景賓の翁、すきの時のまことのれ

許六

曲の年月

花あふうはうるゝ成まわれ

其角

なるる工番う面もり
えらま葉ちくまうりて

人の花ふかくとあぶの風

三浦のさなすいとあ生む
お風へせうる恨もゆめく

年うぐく

あくね人のあくねいやまを下

元翠

哀傷の向む自他秋殊をよきよへ
税務各残る前別哀傷をよへく

對しつて向りなまく向以ひづらう
よぬあくね

移り代を續あゆそ春乃移

かくよとむかよと人を移すと

轉ともおも瀧ゆめよちの風

ふくつよとおも瀧ゆめよちの風
す別なりこれ舊門のゆくゆり一叶
す通とむく

述懷

多事の事ぬ旅宿の里や秋の空
ほのうとすとすと秋の秋

着

八橋

葉かくもてんての氣の浮世

野坡

懷舊

高館の古戰場

夏草や兵士の氣の變

翁の邊すくに風の吹き

竹の獨洗ひ一絲也これ

曲翫

おと夢りアス

さうのまえをゆきがまの乳房

風洗

雨讀

鞍骨の雨

稻ほややまのよきぬの雨の穂

翁

涼風の雨

傘一柄の月よみゆきの雨の舟

其角

松の雨

よがくらゆてあらむ國の月

鬼貫

布袋の雨

大鹿淳一禪師の指の手筋

其角

人聲の繪子

月夜の境をよりほとそん

才聲

僕僕ハ他ノ角りつるを

ありとどくの聲ノ筆ノ手

其角ノ笔を絵テ筆あよ東坡の聲と
出セり自のるかといひて後ナラム
笠重吳天雪ヨトシの聲を又转つ
句うり多角のうから後子

安^{アシ}カ^カの聲

ありやわ萬の聲の筆ノかしら

西^{アシ}筆^{シテ}をやるの筆ノあすみを

アシキサナヒサキサキモ^{アシ}後^{アシ}アシ
アシ^{アシ}と^{アシ}其門の^{アシ}アシ^{アシ}詩ハ有声の
画^{アシ}も^{アシ}其^{アシ}の^{アシ}古^{アシ}人の^{アシ}聲
お^{アシ}故^{アシ}よ^{アシ}聲^{アシ}も^{アシ}其^{アシ}の^{アシ}餘情^{アシ}を^{アシ}り
アシ^{アシ}アシ^{アシ}

青^{アシ}や^{アシ}破^{アシ}や^{アシ}ゆ^{アシ}の春^{アシ}の色

素堂

ちも^{アシ}や^{アシ}も^{アシ}め^{アシ}る^{アシ}の^{アシ}其^{アシ}

翁

き^{アシ}が^{アシ}ぬ^{アシ}相^{アシ}ひ^{アシ}や^{アシ}其^{アシ}の^{アシ}其^{アシ}

今^{アシ}を^{アシ}敵^{アシ}萬^{アシ}の^{アシ}幅^{アシ}對^{アシ}の^{アシ}後^{アシ}アシ^{アシ}

等^{アシ}ふ^{アシ}り^{アシ}い^{アシ}の^{アシ}一^{アシ}

補^{アシ}或^{アシ}人^{アシ}枯^{アシ}木^{アシ}鳥^{アシ}の^{アシ}あ^{アシ}と^{アシ}画^{アシ}秋^{アシ}
の^{アシ}き^{アシ}う^{アシ}年^{アシ}を^{アシ}も^{アシ}ひ^{アシ}る^{アシ}昇^{アシ}與^{アシ}

立るやうの花をかむ草人あめの草る 向雄

發句の体をひき

花をさすやうなたの句

花の香清のよみう淺草を

翁

うそとゆて侍團の草哉 去来

翁

あはれのあく出世され 沾蓬

そややうだら

波哉や鶴脛ぬまえ海流一

翁

名角やあめくじふねのかけ 其角

桃源の時々能のひうち

翁

ふくふくはきる

杜宇大紅色の城の間宿

翁

湖水のあくさり多きも有る

去来

あはれのうつむく中野の風

杉風

わざくかくいもる

さくらのあめの花のあめを

翁

ひとはく又うるおう日新う年

露沾

はまくひのまへ拂ふときまへ

丈草

範子をもよおした向

ぬきでりくらみにしやふのま秋

翁

墨鶴城不そせうと夜はま

萬齡

あくわせひよくよなみ

支考

出云のくわ句

ゆの木の花とゆきとゆく匂いうね

翁

おうして郊のものはかじゆく

山川

名月や新月までのあめの木

閨房

其のうへさう

初生の葉をみやまく輪もやん

翁

あらびき花の人の長刀

去來

黄の鶴や二年五合の暮年貢

曲翫

せきや色あきのるものとす

妓入

やのむやくう桺のねりいは

翁

真ゆきひよす向の移うの縁うれ

轍士

あくわせゆうはく掲う下わらち

塵生

相い感情なるる

翁

酒のまへいわく席のまわらむを

翁

ひと番あて拂のまふみぬかだうあくめ

ほくふくゆきゆきゆきゆきゆきゆき

小春

春

觀相

春

萬のまふの表アスガタナリ今朝の裏

ミタモヒルアキナムを擇哉

本節

ハトシテ地を高ム高ム衣也

越人

マ類アシヌと見お

曲畢

アシテ互アシテ少アシテ持幕引

翁

アシテ互アシテ少アシテ持幕引

似芳

アシテ互アシテ少アシテ持幕引

翁

較アシテ互アシテ持幕引

其角

較アシテ互アシテ持幕引

不角

又

清経の口小善を五人麻のま

翁

寒アシテ互アシテ持幕引

因果經

酒吟

監人の候アシテ互アシテ持幕引

来山

又

寺の池や水の邊の木の葉
かくややかな紙の枚の色

翁

許六

かくやの橋や塗の面へ一箇

翁

船の舟宿をうて楊水の吹や洞

翁

素堂

楊水

一作ある句

床の席を簾ふるひもやきよ

翁

馬の鞍をぬぐひ松のあじし哉

翁

えまみて紙幅をなるきよ

翁

の向くを待悪くわづりを
りゆのせりゆめさる東へうきだらう
かく人曰一絆すあおぞらとやけい
りのくふのそとくのせきとく
はきをうづくとくとて巻中
向くこうとくとくもとくかのひもめく

田文

翁

ほらのあひきやまやまわはる ト宅
ねじは波白まよほしれ 冰花

物の名

鶴 鶴 寒 鶴 雪 番 番 暮 厚
うすらん時見かくと御さかま 菊峰

蓑 蓑

紀

八戒

水せ

淀

鴨 鴨 鳥 鳥 一水の鳥

立吟

圓文物のゑねもとまつ わくとも お
かくのこころもあらもいせふふふのふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

と紙用るふうに純紙りり古ふを
あふまもむるふうに古ふを





